市川のまち 地名の由来

《No.12》

市川の散歩道スタンプより「葛飾八幡宮」

八幡・南八幡

葛飾八幡宮在所の地

ヤハタ、またはヤワタの地名は、全国各地に点在しています。そして、この地名があるところには必ずといってよいほど、八幡神が祀られています。ですから、場所によっては、〝ハチマン〟とも呼ばれています。

八幡神を祀ったお宮は、全国の神社数の約四〇%を占めているといわれ、わが国で最も数の多いお宮です。祭神は、応神天皇（別名、誉田別尊＝ほむだわけのみこと）と母の神功皇后（別名、大帯姫命＝おほたらしひめのみこと）、それに姫宮の比売神（ひめがみ）の三座を一体として祀ったものですが、お宮によっては、比売姫を玉依姫命（たまよりひめのみこと）または仲哀天皇に代えてお祀りしているところもあります。しかし、主神は、すべて応神天皇（誉田別尊）です。

「八幡」の地名の起こりについてはいろいろな説があり、明らかではありません。しかし、本市の八幡は、平安時代の初めに建てられた「八幡社」から起こったもので、これは現在の葛飾八幡宮にあたります。江戸時代の寛政五年（一七九三）一月、大風で葛飾八幡宮の社殿西側にあったケヤキの枯木が倒れ、その根株から総高一一七㌢の梵鐘が出現しました。この梵鐘は、元亨元年（一三二一）に葛飾八幡宮に奉納されたもので、その銘文によると、葛飾八幡宮は今から千百年ほど前の寛平年間に、下総第一の鎮守として建立された宇多天皇勅願の社（やしろ）で、源頼朝の崇敬が厚かったと記されています。

「八幡神」が祀られたこの地域は、古くから八幡庄として、かなり広い範囲を占めていました。また、葛飾八幡宮の祭礼には農具市がたち、関東一円に知られていました。現在でも「八幡の農具市」として、毎年九月に開かれています。

明治二十二年、旧八幡町、菅野村、宮久保村が合併して八幡町となり、同四十四年には八幡町が中心となって、周辺の十カ町村が耕地整理を実施しました。大正八年、ようやく工事は完了し、それを記念した「改耕碑」が、参道の京成電鉄軌道脇に建てられました。昭和九年十一月、市川町・中山町・国分村と合併して市川市となり、市庁舎が現在地に建設されました。昭和四十二・四十三年、住居表示の実施で、総武線以南の八幡町と稲荷木の一部が南八幡となりました。

◇

前回「国分」の記事の最後に「昭和四十九年、住居表示の実施で、曽谷町の西部低地、春木川と国分川にはさまれた地域が東国分となりました。」という部分が抜けていました。お詫びいたします。

次回は「新井」を予定しています。

（社会教育指導員・綿貫喜郎）